

令和元年6月19日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K01515

研究課題名(和文) 教育実習生と共にメンターも体育教師として成長する教育実習プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of Student Teaching Program for Promoting Mentors to Become Better PE Teachers with Student Teachers

研究代表者

鈴木 直樹 (SUZUKI, Naoki)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：60375590

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：アジア圏、ヨーロッパ圏、米国という地域間において教育実習の期間や頻度など、その実施形態に大きな違いが見られた。また、地域に関係なく、共通してメンターの育成に対して積極的な取り組みは見られず、大学教員も積極的に教育実習には介入していないことが明らかになった。また、対話的にメンターも教育実習生と共に成長できている背景にあるシステムをインタビュー調査によって分析、整理を行い、受け入れる教師側が成長する機会となる為の教育実習プロセスを6段階でモデル化した。これを導入した結果、メンターと教育実習生の間に関係性を創り出すことにつながり、メンターの成長に寄与することを理解することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、学び続ける教師が希求されている中で、教育実習を学校現場と大学をつなぐ教師の成長の場として捉え、教師のContinuing Professional Development(継続的な職能教育)としてプログラムを開発することができた。この実践によって、教育実習に対して学生のみならず、メンターにとってもポジティブな学びの意味を見出すことができた。現代の教員養成改革の中では、より実践的な教育カリキュラムが求められ、本研究の結果は、教育実習をCPDの機会として積極的に受け入れるようにし、共同体としての学校を育むことにもつながるといえる。

研究成果の概要(英文)：A big difference was seen on the Student Teaching, such as the period and frequency of it between Asia, Europe, and the United States. In addition, regardless of the area, it is not positive to develop mentors on the student teaching in common. It became clear that university professors were not actively involved in student teaching. The system for student teaching in which mentors can grow with teaching students interactively was focused. That was analyzed by the data collections with interviews. The process of student teaching was modeled to be an opportunity for the accepting teachers to grow in six stages. As a result of introducing this, it was cleared that it leads to creating relationships to learn between mentors and student teachers and that they contribute to the growth of mentors.

研究分野：体育科教育学

キーワード：教育実習 メンター 職能開発 体育・保健体育 メンタリング 教師の力量形成

1. 研究開始当初の背景

教職課程カリキュラムの中核に教育実習は位置づけられており、2006年の中央教育審議会の「今後の教員養成・免許制度の在り方について」（答申）では、「教育実習の充実・改善」が教職課程の質的水準の向上の柱としてあげられている。先行研究では、教育実習が学生の教職観に与える影響は大きく、授業に関する具体的なイメージを豊かにすることが明らかにされており（貫井ら、2001）、教職志望を高める一定の効果が認められている（阿形、2005）。また、米沢（2010）によって、初任期の教職への適応に対して教育実習が重要であることが明らかにされている。さらに、現職教師が教育実習を振り返り、それが重要な経験であったと認識している（別惣ら、2008）ことから、教育実習は、教員養成課程における重要な学習の場となっているといえる。

ところが、教育実習は受け入れる側の学校や教員にとって負担となっている現状が示唆されている。その理由の一つには、教育実習において指導をする教師は、メンターとして教育実習生を指導するという仕事を通常の仕事に加えて抱え込むことにある。教育実習において、メンターの役割が重要であり（浅田、2007）、メンタリングを向上・改善していく取り組み（小柳、2011）が行われている。木原（2000）は、教育実習生の指導を行うにあたり、メンターとしてメンタリングに必要な能力を育成すべきであることを提言している。このように教員養成課程の学生を育てるといった視点に立った教育実習におけるメンターとしての現職教員の力量形成については、研究が行われ、教育実習生の学びという視点からメンタリングの力量が検討されてきた。一方で、教育実習を受け入れる側がメンタリングを通して教師として成長する点に注目した研究は見当たらない。すなわち、教育実習とは、「学生が育つ場」と考えられているからといえる。ところが、教育実習が、「受け入れる側の教師の成長の場」となる可能性が、以下のような研究への取り組みから示唆されるようになった。

ところで、研究代表者は、質的な研究方法の開発《2005 - 2007 科研費研究》で、教師行動の変化を促し、質の高い授業を支える方法の開発をしてきた。しかしながら、この質的な研究による授業改善では、「観察」の教師行動が欠落する傾向にあった。そこで、教師の観察行動におけるエクスパタイズ向上について明らかにしてきた《2008 - 2010 科研費研究》。この研究を通して、教師が適切なスタンダードを持ち、授業を観察することで教師の力量形成を支えることが明らかとなった。これは、反省的实践家に特徴的な姿であり、反省的な実践家として成長できる体育教師の指標となるスタンダードを明らかにし、実証的に検証してきた《2011 - 2013 科研費研究》。この研究を通して、教師の成長にとって、異質な考えとの出会いとその観点に立っての振り返りの経験が大きいことが明らかになった。また、政策が変わっても教師が変わらない（Chen, 2013）という状況下において、大学との連携の中で新しい知と出会う契機となる教育実習は、現職教師にとっても、重要な機会になることが示唆された。しかしながら、実習を受け入れる教師にとってはメンタリングを通して自らの体育教師としての力量形成をする機会にはなっておらず、一方向的な指導に終始している現状が明らかとなった《2012 - 2013 東京学芸大学・特別開発研究》。加えて、現職教員と教員養成課程の学生が協働して授業づくりに参加していくことによって、双方の力量形成が促されることが明らかになりつつある《2014 文部科学省受託事業》。そこで、これまでの研究を踏まえ、教育実習の改善を企図した研究に取り組むこととした。

2. 研究の目的

本研究では、教育実習を教員養成という視点からだけではなく、現職教員の力量形成の場として捉え、その現状と課題を明らかにする。また、長期間の教育実習を実施している海外の国を対象として、現職教師が教育実習にかかわりながら、どのように成長しているかを明らかにしていく。したがって、一方向的に、教育実習を現職教師が学生に知識を与える場として考えるのではなく、教育実習という世界にかかわりながら共に成長する場として捉えなおすことによって、互いに意味のある機会に転換することができると考える。このように、本研究では、体育教師の成長に着目し、「学び続け、成長し続ける教師」を助ける学びの場として教育実習を捉え直し、プログラムの開発を行うとともに、その手がかりの還元を行い、教育実習を指導

する側の教員にとっての成長の機会として保障するプログラムを提供することを目指し、下記の3点を目的として設定した。

- (1) 受け入れる側の教師や学校に対する教育実習の機能について明らかにする。
- (2) 教育実習における現職教師の学びという視点から促進要因と阻害要因を明らかにし、効果的な教育実習プログラムを開発する。
- (3) “Continuing Professional Development (以下、CPD と表記する)” としての教育実習プログラムを実践し、その有効性を見出す。

3. 研究の方法

- (1) 受け入れる側の教師や学校に対する教育実習の機能について明らかにする。
 - ・国内外の大学への質問紙調査を実施し、教育実習の現状を分析した。
- (2) 国内外で実施されている教育実習におけるメンターである体育教師の成長に関する現状を明らかにする。
 - ・長期間にわたり教育実習を行っている国におけるメンタリングによる体育教師としての力量形成に関して、現状と課題を整理する。調査は、観察とインタビューによって行う。
 - ・国内外の学校にて、指導する側の教師と学生のかかわりに注目して、フィールドワークを実施し、教育実習における指導教員と学生の力量形成を明らかにする。
- (3) 調査で明らかになったことを基にしてメンターが成長できる教育実習のプログラムを開発する。
 - ・教育実習におけるメンターの成長要因と成長を阻害する要因を踏まえて、現状の教育実習のプログラムを評価し、改善をする。
- (4) 開発したプログラムを導入し、成果を検証する。
 - ・本学附属学校を対象として実施する。実施校は、体育に限定している為、中学校を対象とすることとした。また、対象とした教員は、熟練教員とし、事例研究として研究を行った。

4. 研究成果

(1) 海外の教育実習の取り組みについて調査を行った。調査は、質問紙調査によって実施し、米国8大学とポーランド、フィンランド、スコットランド、中国、台湾、韓国の各1大学ずつから回答を得た。これらの回答を一覧にまとめ、日本の教育実習との相違を明らかにした。その結果、アジア圏、ヨーロッパ圏、米国という地域間において教育実習の期間や頻度など、その実施形態に大きな違いが見られた。また、地域に関係なく、共通してメンターの育成に対して積極的な取り組みは見られず、大学教員も積極的に教育実習には介入していないことが明らかになった。米国などでは、大学で教育実習の振り返りを設定しているところがあるものの、教育実習の取り組みに対しての直接の介入やメンターの育成に対する研修などはなく、学校現場と大学との連携は希薄であることが明らかになった。

(2) 海外でメンター及び教育実習生に教育実習に関わるインタビュー調査を実施した。インタビューは米国の4地区、フィンランド、スコットランド、中国、台湾、韓国の各1地区で実施した。インタビュー方法は半構造化面接とし、平均して30分程度であった。インタビューは分析するために全て逐語録化した。また、米国、豪州、フィンランド、スコットランドでは、教育実習への取り組みを参観し、具体的な取り組みの状況とメンターと実習生の関係を授業を通して観察を行った。その結果、メンターと教育実習生の成長の仕方と両者の関わり方の違いが明瞭になった。すなわち、メンターが教え、教育実習生が学ぶという関係においては、メンターの成長は見出し難い一方で、メンターも教育実習も対話的な関係で授業を考えるような関係においては、両者の成長を見出すことができた。このような状況下において、メンターの教育実習生に対する態度がどのように生まれているのかを、インタビュー調査を手掛かりとして分析し、教育実習の違いのある国間で比較を行った。その結果、教育実習の方法に影響を受けているというよりは、教育実習に対する考え方に強い影響を受けていることが明らかになった。すなわち、教育実習に対しての意義や目的などを含めたメンターの考え方が強く影響し、

教育実習における実習生のかかわりに影響をしていることが明らかになった。このことは、学校現場でメンターとして指導にあたる教師側の認識によって、教育実習が学びにもなりえりし、単に仕事として終わってしまうことを暗示しているといえた。以上のことを踏まえ、対話的な教育実習を開発することにした。

(3) 研究結果の(1)と(2)を踏まえて、具体的な教育実習の実施プロセスを検討し、対話型の教育実習を検討した。その結果、開発された教育実習のプロセスは、「1)教育実習生が学んできたことをメンターが知る。2)教育実習生がメンターの授業を観察し、これまでの学びを手がかりにして批評する。3)教育実習生とメンターが共に授業を構想する。4)大学教員を含めて教育実習生とメンターで授業づくりについて検討する。5)教育実習生が授業実践をしてメンターが観察し、授業改善を行う。6)大学教員も含めて教育実習生とメンターとで振り返りを行う。」といったものであった。

(4) 開発した教育実習のプログラムを導入し、実践を行い、実践に参加したメンターと教育実習生(2名)に対してインタビュー調査を行い、プログラムの効果について検討を行った。その結果、実習生にとっては大学での学びを生かし、実践と理論を橋渡しする経験になっていることが明らかになった。また、実践に参加したメンターの振り返りから肯定的な取り組みだったことを理解することができたと共に、新しい気づきを多く生んだことを見出すことができた。このような取り組みによってメンターと教育実習生の間に学び合う関係性を創り出すことにつながり、メンターの成長に寄与することを理解することができた。とりわけ、このような取り組みによって教育実習生のメンターに対する尊敬度合いが非常に高まったことが、インタビューから理解でき、大変興味深く感じられた。

開発した教育実習のプログラムについて、東京学芸大学大学院の授業で講義内容の一つとして提供し、学生たちの協議の題材とした。また、米国のニューヨーク州立大学コートランド校とブリッジウォーター州立大学の2大学で研究で明らかになった教育実習モデルの提示を行い、それを活用した教育実習の成果について具体的なデータを元に説明を行い、大変高い評価を得ることができ、他国での実践可能性についても検討することができた。

<引用文献>

- 1) 阿形健司(2005) 学生の教職観に与える教育実習の効果-パネル調査の結果から-.愛知教育大学研究報告(教育科学編)
- 2) 浅田匡(2007) 幼稚園教育実習におけるメンタリングの機能に関する研究(教育心理学と実践活動). 教育心理学年報 46, 156-165.
- 3) 別惣淳二・岩田康之・梅澤実・諏訪英広・米沢崇(2008)「教員の資質と力量に関する調査」(研究代表者:別惣 淳二)『平成 18・19・20 年度兵庫教育大学教育・社会調査研究センター研究プロジェクト』
- 4) Chen, X.(2013)Meta-teaching:Meaning and Strategy.Africa Education Review, 10(1), S63-S74. doi:10.1080/18146627.2013.855431
- 5) 木原成一郎(2000)イギリスの「学校を基礎とした教員養成」(a school-based initial teacher training)におけるメンターとしての学校教員の役割-小学校の体育授業を中心として-, 広島大学学校教育学部紀要第1部, 第22巻, 59-70.
- 6) 小柳和喜雄(2011) 英米におけるミドルリーダー教員の研修に関する事例研究.奈良教育大学紀要.人文・社会科学 60(1):131-141.
- 7) 貫井正納・市川洋子・吉田雅巳(2001)教育実習前後における学生の授業意識--アンケートによる調査から.千葉大学教育学部研究紀要(教育科学編).49:109-114

- 8) 米沢崇 (2010) 実習校指導教員の役割と指導・支援に関する検討-A 大学附属の小学校の指導教員と教育実習生を対象とした質問紙調査の結果を中心にして-.教育実践学研究第 11 巻 第 2 号 : 11-20

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 (計 1 件)

Naoki SUZUKI, Seiji OKUMA, Satoshi ISHIZUKA, Takayuki ABE, Yasutaka OHTA, Hironobu MASUDA(2017) PHYSICAL EDUCATION WITH THE ICT FOR CONSTRUCTIVIST LEARNING. Proceedings at IETC. Vol.2. pp. 104-109 (査読有)

〔学会発表〕 (計 6 件)

Naoki Suzuki(2018) Student Teaching Mentoring as Professional Development. Special Lecture at Bridgewater State University (招待講演)

Naoki Suzuki(2018) Innovation of Student Teaching for Cooperating Teachers -- For becoming a better teacher --. Special Lecture at State University of New York at Cortland (招待講演)

Naoki SUZUKI, Seiji OKUMA, Satoshi ISHIZUKA, Takayuki ABE, Yasutaka OHTA, Hironobu MASUDA(2017) Physical Education with the ICT for Constructivist Learning. International Educational Technology Conference (Boston, USA)

Naoki Suzuki (2016) Comparison study on Cooperative Teachers' attitude towards student teachers. AIESEP International Conference(Laramie, Wyoming, US)

Naoki Suzuki (2016) International Comparison of Participants in Student Teaching - for Becoming a Good PE Teacher. 2016 International conference for the 5th East Asia Alliance of Sport Pedagogy. Taiwan Society for Sport Pedagogy. (台湾師範大学, 中華民国)

Naoki Suzuki, Yuki Nakamura and Yukihiro Kudo(2015) Professional Learning for Preservice Teachers With In-Service Teachers. PETE & HETE Conference 2015 (Atlanta, USA)

〔図書〕 (計 2 件)

鈴木直樹・鈴木一成編著 (2019) 体育の「主体的・対話的で深い学び」を支える ICT の利活用. 創文企画 (総ページ 183 ページ)

鈴木直樹・成家篤史・石塚諭・阿部隆行(2017) 子どもの未来を創造する体育の「主体的・対話的で深い学び」. 創文企画 (総ページ 173 ページ)

〔産業財産権〕 (計 0 件)

〔その他〕 (計 0 件)

6 . 研究組織

(1) 研究分担者

(2) 研究協力者

研究協力者氏名 : デイビッド カーク (University of Strathclyde, UK)

ローマ字氏名 : (KIRK, David)

研究協力者氏名 : ピルビッキ ヘキナロ (University of Jyväskylä, Fn)

ローマ字氏名 : (HEKINARO, Pilvikki)

研究協力者氏名：ティモシー デイビス (State University of New York at Cortland, USA)
ローマ字氏名：(DAVIS, Timothy)

研究協力者氏名：カレン リチャードソン (Bridgewater State University, USA)
ローマ字氏名：(RICHARDON, Karen)

研究協力者氏名：ステファン ミッチェル (Kent State University, USA)
ローマ字氏名：(MITCHELL, Stephen)

研究協力者氏名：ケー ニィッ チン (Taiwan Normal University, TW)
ローマ字氏名：(CHIN, Keh Nyit)

研究協力者氏名：デイビッド リー (Yonsei University, KR)
ローマ字氏名：(LEE, David)

研究協力者氏名：ヤンリン リー (Hunan Normal University, CH)
ローマ字氏名：(LI, Yanglin)

研究協力者氏名：アリス コステンカ (Kazimierz Wielki University in Bydgoszcz, POL)
ローマ字氏名：(KOSTENCKA, Alicja)

研究協力者氏名：ジョン クウオイ (University of Melbourne, AU)
ローマ字氏名：(QUAY, John)